

[10]

氏名	中葉芳子
博士の専攻分野の名称	博士(文学)
学位記番号	博第466号
学位授与の日付	平成25年9月19日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
学位論文題目	『源氏物語』享受史の研究
論文審査委員	主査教授 山本登朗 副査教授 原田正俊 副査教授 田中登

論文内容の要旨

本論文は、『源氏物語』の伝本、古注釈、梗概本、およびそれらの古筆切について、多くの資料の分析をもとに、さまざまな角度から検討をおこない、中世から近世初頭にかけての『源氏物語』享受の多様な展開の姿を明らかにしようとしたものである。

本論文の構成は以下の通りである。

第一章 関西大学図書館蔵『源氏物語』の本文

第一節 書入れを中心に

第二節 書写活動と性格

第二章 『源氏物語』の注釈

第一節 一条兼良の『源氏物語』研究と応仁の乱

第二節 『花屋抄』の本文意識

第三節 『花屋抄』の注釈態度

第三章 中世源氏物語の世界

第一節 静嘉堂文庫所蔵『源氏露』をめぐって

第二節 静嘉堂文庫所蔵『源氏露』考

1 唐人の贈り物

2 唐の舞

第三節 静嘉堂文庫所蔵『源氏露』(解題・翻刻)

第四章 『源氏物語』の古筆切

第一節 鎌倉期における『源氏物語』梗概化の方法

第二節 中世における『源氏物語』梗概本の古筆切

第三節 『山路の露』の新出断簡をめぐって

冒頭の第一章「関西大学図書館蔵『源氏物語』の本文」で中葉氏は、近世初期の書写と考えられる関西大学図書館所蔵の『源氏物語』(C/913/36//1)を取り上げ、その本文や書き入れが、当時『源氏物語』研究の主流をなしていた三条西家に関わる、日本大学蔵の『三

条西家証本』をはじめとする諸本と近い関係を有していることを確認した上で、当時の公家社会における『源氏物語』書写活動のありかたについて考えている。

次に、第二章『『源氏物語』の注釈』で、中葉氏は、『花鳥余情』『花屋抄』という、室町時代から安土桃山時代にかけて成立した二種類の注釈書について論じている。まず、第一節「一条兼良の『源氏物語』研究と応仁の乱」では、中葉氏は、当初は朝廷や幕府の中心人物を対象に『源氏物語』を教授していた一条兼良が、応仁の乱によって都から奈良に避難したことをきっかけに、その対象を地方の武家や連歌師にまで広げ、その結果『花鳥余情』という注釈書が生み出されたと主張する。続いて第二節『『花屋抄』の本文意識』、第三節『『花屋抄』の注釈態度』では、『花屋抄』が『源氏物語』の本文異同に注意していることに注目するとともに、それが「おさなき人・女達」といった初心者むけの注釈であったことを述べている。

第三章「中世源氏物語の世界」で中葉氏は、「光源氏巻名歌」に解説を加える形で書かれている一種の梗概書『源氏露』を取り上げ、その内容をさまざまな視点から検討するとともに、章の末尾に静嘉堂文庫所蔵『源氏露』の解題と翻刻を加えている。まず、第一節「静嘉堂文庫所蔵『源氏露』をめぐって」で、中葉氏は『源氏露』の内容の分析から、それを中世の連歌師達の特異な源氏学、すなわち「中世源氏物語の世界」を伝えるものであるとする。次に、第二節「静嘉堂文庫所蔵『源氏露』考」では、中葉氏は「唐人の贈り物」と「唐の舞」という二つの視点から、あらためて『源氏物語』そのものから時に大きく逸脱する『源氏露』の内容について考察し、中世にさかんに行われた秘説、秘伝の世界との関わりに注目している。

最後の第四章『『源氏物語』の古筆切』では、まず中葉氏は、『源氏物語』そのものではない、梗概本などの古筆切について検討し、それを通して『源氏物語』の享受の実態について考察している。中葉氏は、まず第一節「鎌倉期における『源氏物語』梗概化の方法」で、従来知られていた『源氏大鏡』『源氏小鏡』以前の鎌倉時代の『源氏物語』梗概本の断簡として「伝後伏見天皇筆源氏物語梗概本切」と「伝二条為明筆源氏物語梗概本切」を検討し、それぞれの梗概化の方法を探った後、第二節「中世における『源氏物語』梗概本の古筆切」では、上記の二種以外の梗概本の古筆切を考察している。最後におかれた第三節『『山路の露』の新出断簡をめぐって』は、『源氏物語』の続編を描いた一種の偽書『山路の露』の新発見の断簡を紹介して論じたものである。

論文審査結果の要旨

本論文は、伝本、注釈、梗概本、およびそれらの古筆切といった、さまざまな側面から、鎌倉時代から江戸時代初頭までの『源氏物語』の享受の諸相について論じたものである。

第一章「関西大学図書館蔵『源氏物語』の本文」では、伝本の本文から、中世後期の古典学を中心であった三条西家の物語研究のありかたに迫ろうとする姿勢が見られ、その姿勢は第二章『『源氏物語』の注釈』で大きく展開している。さらに第三章「中世源氏物語の世界」では、そのような正当な研究から逸脱した特殊な周辺世界にまで視野が広げられ、それが第四章『『源氏物語』の古筆切』における梗概本や一種の偽書である『山路の露』への言及につながっている。このように、正当な物語研究から大きく逸脱した世界まで、『源

氏物語』を取り巻くさまざまな世界を大きな視野で捉えようとしたところに、本論文の大きな特色がある。

中でも、もっとも興味深い論が展開されているのは、第二章第三節、第四節の『花屋抄』についての研究と、第三章の『源氏露』についての研究である。『花屋抄』も『源氏露』も、本論文以前にはほとんど研究されたことのない文献だが、前者の『花屋抄』は、他に例を見ない、撰関家出身の尼僧によって書かれた『源氏物語』注釈であり、本論によって明らかにされたいくつかのことがらは、尼門跡文化の研究をはじめとする文化史研究全体のためにも注目すべき内容を含んでいる。

また、後者の『源氏露』は、『源氏物語』の梗概本のような形をとりながら、『源氏物語』の内容を大きく逸脱する独自の世界を展開しており、御伽草子のような他ジャンルとの相互交渉も考えられ、中世における古典享受のありかたを考える上で、貴重な資料とすべきものである。

筆者の研究には今後なお課題とすべき部分も多いが、本論文でひとまず示された達成には、今後一層の発展を期待させる要素も多く含まれており、全体的に見て、筆者の研究は、学界に十分な寄与をなし得るものと考えられる。

よって、本論文は博士論文として価値あるものと認める。